Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

奄美大島瀬戸内町方言のとりたて助辞「アティム」に関する一考察 : 標準語の「でも」との比較を中心に

齊藤, 美穂
水谷, 美保

(Citation)
神戸大学留学生センター紀要, 18:51-78

(Issue Date)
2012-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003886

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003886

KOBE UNIVERSITY

神戸大学
留学生センター紀要　18：51 ～ 78，2012

奄美大島瀬戸内町方言のとりたて助辞「アティム」に関する一考察
―標準語の「でも」との比較を中心に―

齊藤美穂・水谷美保

キーワード：とりたて、瀬戸内町方言、アティム、でも

１．はじめに

本稿では、奄美大島瀬戸内町方言話者を対象に行った、とりたて形式に関する調査結果の一部を報告し、標準語との比較対照を試みる。具体的には、当地方言における「アティム」という形式に注目し、「でも」をはじめとする標準語のとりたて助辞[1)]との類似点・相違点について検討する。

以下ではまず、第２節において標準語の「でも」に関する先行研究の記述を概観し、第３節で、本研究で行った奄美大島瀬戸内町方言（以下、「瀬戸内町方言」と称す）の調査の概要を示す。そして、第４節において、瀬戸内町方言における「でも」に相当する形式に関する調査の結果を示したうえで、当地方言の「アティム」という形式を取り上げ、標準語の「でも」及び類義形式との比較を試みる。最後に第５節で、本稿で述べた調査結果のまとめを行い、今後の展望を述べる。

２．標準語のとりたて助辞「でも」

標準語のとりたて助辞「でも」は、〈譲歩〉や〈例示〉を表すとされる（丹羽1995参照）[2)]。もともとは、いわゆる「断定の助動詞「だ」」の中止形にとりたて助辞「も」がついたものからできたと考えられており、本来は（1）のような〈逆接仮定条件〉を表す従属節の、名詞もしくは第二形容詞（いわゆる形容動詞）述語を構成する形式である[3)]。（2）のように複数の条件を並列することも可能である。

（1）相手が女の子でも、先生は容赦なくしかった。
（2）生まれてくる子が男の子でも、女の子でも、この家を継がせる。

上の例文のように述語として節の一部を構成していたものから、以下のように対応する主語をもたず（つまり従属節の述語にはならず）、文中の名詞について、〈譲歩〉

の意味を表すとりたて助辞として用いられるようになったものが、とりたての「でも」の始まりと考えられる[4)]。

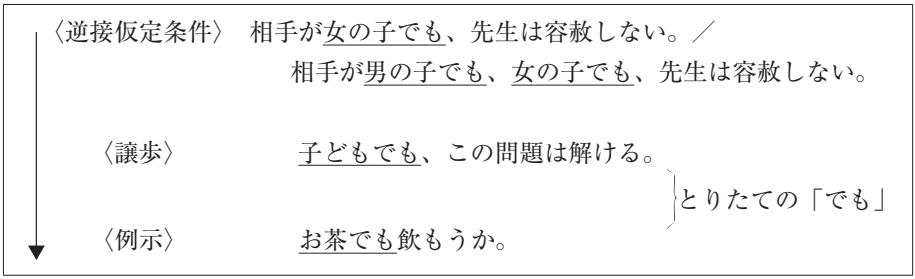
(3) 雨でも試合は行われる。
(4) そのくらいのことは子どもでもわかる。
(5) 明日でも、あさってでも、時間は作れるよ。

やがて〈譲歩〉的な意味が薄れ、次に挙げる〈例示〉のような使われ方が派生したと考えられる。ただし、このような〈例示〉が可能になるのは、叙述文なら推量の文、そうでなければ質問文や勧誘文といった、基本的に未確定なことを表す文に限られる（澤田2007等参照）[5)]。

(6) 山田のことだから、おおかた寝坊でもしたのだろう。(* 山田は寝坊でもした。)
(7) ちょっとこのへんで、お茶でも飲もう。(* 疲れたからお茶でも飲んだ。)

ここまでに述べた「でも」の意味・機能を整理すると図1のようになる。それぞれは截然と区別できるものではなく、徐々に〈逆接〉的意味を薄めながら、矢印が示すような順に派生していったと予想される。

【図1：「でも」の意味・機能】



以上本節では、先行研究の記述をもとに、標準語のとりたて助辞「でも」について以下のことを確認した。

①「でも」は、本来、名詞（もしくは第二形容詞）述語の中止形「名詞-で（第二形容詞語幹-で）」に、とりたて助辞「も」がついたもので、〈逆接仮定条件〉

を表す従属節の述語を構成していた。

②とりたての「でも」には、〈譲歩〉及び〈例示〉を表す意味があるとされる。

③〈例示〉の場合には、その使用が、未確定な事態を表す文に限られる。

これらの点をふまえて、以下では瀬戸内町方言の調査結果を見ていく。

3．調査概要

調査結果を示すに先立ち、本節では調査の概要を説明しておく。

3.1　調査地

本研究が調査対象としているのは、北部琉球方言に属する、鹿児島県大島郡瀬戸内町の方言である。瀬戸内町は、大島海峡を挟んで加計呂麻島と向かい合う、奄美大島南部の町である。奄美大島では集落ごとに方言の違いが見られるため、本稿では地域を限定した､「瀬戸内町方言」という呼称を用いる。

【図２：調査地の位置】



3.2　調査対象者

調査対象者は、1946年生まれの、2006年調査当時60歳の女性である。居住歴を以下に示す。

【調査対象者の居住歴】

０－16歳：瀬戸内町野見山、16－18歳：瀬戸内町古仁屋、18－20歳：大阪府、
20－55歳：名瀬市、龍郷町、瀬戸内町諸鈍、請島、大和村、
55－調査時（2006年８月）：瀬戸内町勝浦

外住歴はあるものの、主に瀬戸内町及びその近郊で暮らしており、地域のお年寄りとの交流のために、いわゆる「伝統方言」も日常的に利用している世代である。

3.3　調査方法

本稿では、2006年８月、2010年９月、2011年９月に行った調査結果の一部を報告

する。いずれの年も、調査票を用いた面接方式で調査を行った。調査票には、下記のような形で場面と、標準語による調査文を記しておき、これを調査者が口頭で提示した。そして、地域の親しい人に当地のことばで言うとどうなるか、回答を求めた。

(8) 旅行に行きました。お土産を探しています。いいシャツを見つけて、友達に「これなんか誰でも似合いそうだね」(2006年度調査票より)

調査ではまず、上記のような調査文に対する自発回答を求めたのち、類義形式等の使用可否を確認するため、必要に応じて調査者が類義形式を用いた例を調査対象者に口頭で示し、その使用可能性、自然さなどについて尋ねた。

4．調査結果

本節では、3節で述べた、瀬戸内町方言調査の結果を述べる。以下では、本稿で分析の対象とする形式に関する調査文と、それに対する自発回答を挙げる[6)]。自発回答後の確認で、他の形式も回答されている場合もあるが、ここでは自発回答を優先的に挙げ、後の調査者による確認で特筆すべき事柄がある場合には、本文中で言及するか、稿末に注記することにする。なお、調査対象者から自発的に複数の回答が示された場合には、回答された順にスラッシュ「／」を挟んで併記する。提示にあたり、調査文は漢字仮名交じりで、回答はカタカナを用いて表記することとし[7)]、回答については、読みやすさを考慮し、分かち書きで示す。

3.3節で述べたように、実際の調査で調査文を挙げる際には、具体的な場面も併せて提示していたが、本稿では紙幅の都合上、割愛する。ただし、調査文の適切な理解のために、必要に応じて場面を明確化するための情報を、簡略化した形で（ ）もしくは［ ］に括って補うこととする[8)]。調査文末尾の【 】内の数字は、調査年と調査票の調査文番号を示すものである。本文中で調査文及びその回答に言及する際には、調査文先頭に付した例文番号を用いる。また、調査結果を示す際には、分析対象となる形式が接続している名詞（及びそれに準ずるもの）全体に下線を施して示す。

4.1 「でも」に相当する形式

まず、本節では「でも」を含む調査文に対する回答を見ていく。結論から言うと、

「でも」に対応して現れるのは基本的に「アティム」という形式である。これは、〈逆接仮定条件〉を表す従属節の述語の場合も、とりたて助辞として〈譲歩〉や〈例示〉を表す場合も同様である。以下、順に例を挙げて確認していく。

〈逆接仮定条件〉の場合：

調査では、〈逆接仮定条件〉を表す、名詞述語の従属節の例を調査文として用意し、回答を確認した。次の調査文（9）では、自発回答で「アティム」が用いられている。（10）では、回答の際まず「シグトゥアタンバム」という形が示された。これは標準語では「仕事だったが」のような〈逆接確定条件〉を表す従属節の述語にあたるものである。この調査文は過去の事実を述べるものであるため、このような回答が出てきても不自然ではない。続けて自発回答で「アティム」を用いた回答も示された。調査文をどう理解するか（一回的な事態か習慣的な事態か）で揺れはあるものの、「アティム」が用いられていることが確認できる。なお、（11）では、「ショーガクセーダムン」という、標準語の「小学生なのに」「小学生だけど」にほぼ相当する回答が示された。これもこの調査文の内容が、「あの子は小学生である」という事実（確定条件）に言及するものであったことによると考えられる。標準語でも〈逆接確定条件〉を表す場合には、接続助辞の「が・けれども」や「のに」といった、「でも」とは異なる形式のほうが多く用いられることを考えれば、これらの結果は自然なものと言える。この調査文（11）について、「ショーガクセーアティム」を用いて言えるかを自発回答後に尋ねたところ、言う人もいるかもしれないが、「アティム」を使うなら、「ショーガクセーアティム　シーキン（小学生でもできる）」のような文のほうが自然だという回答であった。これは、「アティム」が基本的に、確定的な事実を述べるものよりも、一般的な〈逆接仮定条件〉を表す場合に使われやすいことを示唆している。この点は、先に述べた標準語の「でも」と、「が・けれども」「のに」との使い分けの傾向と共通している。

（9）（うちの洗濯機は）型は昔のでも、汚れはよく落ちるんだよ。【2010-51】
　　カタヤー　ムカシヌムンアティム、ユグリヤ　オティーユッドー
（10）（父は昔、）次の日が仕事でも、飲み歩いていたよ。【2010-50】
　　トゥグノ　ヒガ　シグトゥアタンバム／シグトゥアティム、ヌーディ　アッキュッタドー
（11）あの子は、小学生でもしっかりしているよね。【2011-33】

アン　クヮヤー　ショガクセーダムン、シッカリシュルヤー

〈譲歩〉の場合：

次に、〈譲歩〉を表すとりたて助辞の例について確認する。この場合、基本的に「アティム」が用いられる。

(12) そんなことは子供でもわかるよ。【2011-31】
ウガッシャン　クトゥヤー　ワラーブアティム　ワカーユンヨ
(13)（子供は怖いもの知らずで）蛇でも素手で捕まえようとするもんね。【2011-28】
マチムンアティム　トゥグシ　トゥカモーチ　シュームチョヤー
(14)［遠方に住む友人が電話で「最近日が短くなったね」と言うのに対し］
こっちは7時でも明るいよ。【2011-32】
クマヤー　シチジアティム　アハガトゥッドー
(15)［日曜日に、道で出会った友人が仕事へ行くと聞き］
へえ、日曜日でも仕事があるんだ。【2011-34】
ニチヨービアティム　シグトゥノ　アンワケジャヤー／アンワケジャー
(16)（私は子供のころ）先生にでも平気で文句言ってたよ。【2010-16】
センセーヌアティム　ヘーキシ　クチヒント　シュータドー
(17) 普通のうちでも、鶏飯ぐらい食べられるよね。【2010-47】
フツーヌ　ヤーアティム　ケーハングラヤー　カミユルヤー／カミュッドヤー
(18) あの絵なら、100万円でもほしいなあ。【2010-s15】
アン　イェーナバー　ヒャクマンエンシアティム[9]　フシャルヤー
(19) 牛乳だけでも飲んで行きなさい。【2010-57】
ギューニュダケアティム　ヌーデ　イキー／イキャンバー

次の２例では、「ヌンキャ」「デム」といった別形式が回答された。(20) の「ヒャクマンエンヌンキャ」は標準語に直訳すれば「100万円など（100万円なんか）」にあたる。この調査文は、子供の進学の話をしていて、私立大学の入学金が100万円であると聞いた場面での発話であるという説明がなされたうえで示されたものである。このため「100万円」という特定の金額について、「大した額ではない」といった否定的評価を込めて、「ヌンキャ（など／なんか）」を用いて回答をしたものと思われる（「（ヌ）ンキャ」の用法については水谷・齊藤2007参照）。一方 (21) の「ビー

ルデム」は、標準語の「ビールでも」に相当するが、この「デム」を用いた言い方は、調査対象者から見ても「標準語っぽい」ものとされる。いずれの調査文についても、自発回答後の確認において、「アティム」を用いて言えることを確認している。

(20)［友人と子供の進学の話をしていて、私立大学の入学金が100万円であると聞き］
　子供のためなら、100万円でも惜しくないよ。【2010-20】
　グヮーノ　タメナバ　ヒャクマネンヌンキャ　アタラシャカネンドー
(21) 最近弱くなって、ビールでもすぐ酔っちゃうの。【2010-15】
　コノゴロ　ユワクナッテ　ビールデム　スグー　イイーユンチョ

以上の例から、標準語の〈譲歩〉を表す「でも」に対応する形式としては、基本的に「アティム」が用いられると考えられる。

〈例示〉の場合：
最後に、〈例示〉の「でも」を含む調査文に対する回答を示す。ここでもやはり「でも」相当の形式として「アティム」が用いられていることが確認できる。

(22) 麦茶でも飲む？【2010-10】
　ムギチャアティム　ヌミュンニャー
(23) そこのせんべいでも食べてて。【2010-11】
　ウン　センベーアティム　カドゥランナー／カマンナー
(24) お昼でも食べようか。【2011-13】
　ヒンマジクアティム　カミュムン／カモーディー
(25)［一緒に山登りに行く友人から、弁当がいるだろうかと尋ねられ、］
　向こうに食堂でもあるでしょう。【2011-18】
　ムコーナン　ショクドーアティム　アーロ
(26)［天井裏から音がするという友人に対し、］
　蛇でもいるんじゃない？【2011-26】
　マチムンアティム　ウームンナーランナ
(27)［草むらに分け入っていく近所の子供に対し］
　蛇でもいたらどうするの。【2011-27】
　マチムンアティム　ウルバ　イキャシュール

(28) こんなことなら、うちでテレビでも見ているんだった。【2011-30】
　カッシャン　クトゥナバ　ヤーナンティ　テレビアティム　ミーバ　イーチャッダー

「でも」が、「が」「を」以外の格助辞を伴った名詞をとりたてている調査文では、「アティム」が格助辞の後に続く形で現れる。(当地方言の格助辞については4.2.1節も参照されたい。) ただし、(31) のように、方向を表すニ格の場合、標準語の場合と同様に、格助辞は省略可能である。

(29) 隣のおばあさんにでも聞いてみようか。【2011-20】
　トゥナンヌ　バーサンヌアティム　キキュームン／キチンニョヤ
(30) [友人の服が破れているのに気づいて]
　ピンででも留めておく？【2011-21】
　ピンシアティム　トゥムーティ　ウキュンナ／ウキュームン？
(31) 温泉にでも行きたいなあ。【2010-13】
　オンセンアティム　イクブシャヤー

〈例示〉の「でも」を用いた調査文で、「アティム」以外が自発回答されたのは次のものである。(32) ではまず「インカ　ヌーカ」という、「犬か何か」に相当する形式が回答された。〈例示〉の場合の「でも」の意味が「(名詞) か何か」と近いことは、先行研究でも指摘があり (澤田2007：67)、この回答は、瀬戸内町方言でも同様の傾向があることを示唆している。また、(33) の「ナヤムグトゥンキャ」は、「悩み事など (が)」に相当する言い方である (水谷・齊藤2007参照)。標準語でも、「など」は〈例示〉を表し、その点では「でも」と共通している[10]。「アティム」とは別の形式が現れたといっても、これらについては必ずしも標準語の「でも」と「アティム」との違いを意味しているとは言えないであろう。実際、自発回答後の確認で、それぞれについて、下線部を「インアティム」、「ナヤムグトゥアティム」にして言えるか尋ねたところ、いずれも可能とのことであった。

(32) 犬でもいれば、気がまぎれるんじゃない？【2010-12】
　インカ　ヌーカ　トゥカーナトゥルバ、トゥドゥンナクン　ネームンナラン
(33) 何か悩みごとでもあるのかなあ。【2010-14】

ヌーカ　ナヤムグトゥンキャ　アルカヤー

このように、〈例示〉を表す「でも」の場合も、瀬戸内町方言では基本的に「アティム」が用いられていると言える。

4.2　瀬戸内町方言の「アティム」と標準語の「でも」

4.1節では、標準語の「でも」に相当する形式として、基本的に「アティム」という形式が回答されていることを確認した。本節では、この「アティム」という形式について、その形式の由来（4.2.1）、〈例示〉における文タイプの制約（4.2.2）、さらに標準語の「でも」との意味・機能の異なり（4.2.3）を確認する。

4.2.1　形式の由来

瀬戸内町方言の「アティム」は、標準語の「でも」とその成立が似ている。瀬戸内町方言を記述した蘇（1993）によれば、瀬戸内町方言では、第二形容詞（蘇1993では「形容動詞」）が述語になる場合、非過去・断定の場合は「語幹 - ジャ」という形をとるが、過去や中止の形をとるときは、動詞「ある」がいわゆる「コピュラ」として用いられる。たとえば、「元気だった」は「ゲンキアタ」、「元気で」の場合は「ゲンキアティ」となるのである（蘇1993参照）。「アティム」は、このコピュラとして働く「ある」の中止形「アティ」に、標準語の「も」に相当する「ム」がついた形式と考えられる。蘇（1993）には、名詞が述語になる場合について明確な記述がないが、標準語と同様に、第二形容詞（形容動詞）が述語になる場合と同じ形式が用いられると考えられる。

本研究では、上記の点を確認するため、下記のような調査文を用いて、調査を行った。まず参考のために、本動詞としての「ある」の例を見ておく。（34）（35）は終止の位置で「ある」が用いられた調査文（順に非過去、過去の例）、（36）は中止形の調査文である。（36）の調査文「あって」に相当するものとして、「アティ」という語形が回答されていることが確認できる。また終止形の調査文（35）の回答においても、「あった（よね）」に対応して「アター（ドヤー）」に続けて「アティ（ヤー）」という形が現れているが、これは当地の方言では、中止形が終止の位置において、過去を表す語形として用いられることによる（蘇1993参照）[11]。

（34）あの山には神社があるよね。【2011-63】

アン　ヤマナンニャ　ジンジャノ　アッドヤー
（35）あの山には神社があったよね。【2011-64】
アン　ヤマナンニャ　ジンジャノ　アタードヤー／アティヤー
（36）裏山に神社があって、毎年お参りしていたんだよ。【2011-65】
ウラヤマナン　ジンジャヌ　アティ、マイトシ　ウガードタドー

次に、名詞述語文の例を挙げる。まず終止形の例である。（37）の過去の調査文に対して、「学級委員をしていたよね」に相当する「ガッキューイーン　シュータドヤー」と並んで、「ガッキューイーンアタドヤー」という、「学級委員（で）あったよねー」に相当する形式が回答されている。

（37）（小学校のころ）あなた、学級委員だったよね。【2011-67】
ウラヤ　ガッキュイーン　シュータドヤー／ガッキューイーンアタドヤー

中止形を確認するための、次の調査文（38）、（39）では、「アティ」ではなく、「ナティ」という形が回答された。「ナティ」は動詞「なる」の中止形と同形で、蘇（1993）によれば、「（ムン）ナティ」という形で原因理由を表すという[12)]。この「ナティ」が、原因理由を表すために用いられたのか、単に「なって」の意で用いられたものかは不明であるが、自発回答後の確認では、いずれも「アティ」を用いて言うことが可能とのことであった。ただし、「「イチバンアティ」は「一番になって」という意味になるから言う人もいる」、「「ロクネンセーアティ」は「６年生で」という意味」と、両者に対するコメントに違いが見られるため、この点については今後より精密な調査を行いたい。

（38）（学生時代）あなたいつも一番で、先生にほめられてたね。【2011-68】
ウラヤ　イトゥン　イチバンナティ、センセヌン　フマェラットタドヤ
（39）（孫は）今６年生で、背もずいぶん伸びたよ。【2010-54】
ナマー　ロクネンセーナティ、チケーダロ　ヌデー／ムル　ヌデータド

参考のため、第二形容詞（形容動詞）に関する調査結果も挙げておく。第二形容詞述語の調査文に対しては次のように回答された。（35）で見た、過去を表す動詞述語文の場合と同様に、（40）の過去の事態を述べる調査文に対して中止形の「ア

ティ」が用いられている。また、中止形を確認するための調査文（41）に対しては、上述の名詞の中止形の場合と同様に「ナティ」が回答され、「まじめだったから」という意であるという、原因理由を含む意味の解説が調査対象者からなされた。その後の確認で、「マジメアティ」と言えるか尋ねたところ、「少し若い人が使うかもしれない」というコメントが得られた。

（40）あなたは昔からまじめだったね。【2011-74】
　　ウラヤ　ムカシカラ　マジメアティヤー
（41）（小学生の頃）あなたはすごくまじめで、いつも一生懸命だったね。【2011-75】
　　ウラヤー　ムール　マジメナティ、イトゥン　イッショケメー　シュータドヤー

蘇（1993）による第二形容詞（形容動詞）に関する記述とは若干異なりがあるため、さらなる調査が必要となるが、「アティム」は、その形式から言って、動詞「ある」の中止形「アティ」に、標準語の「も」に相当する、当地のとりたて助辞「ム」がついたものと考えられる。先に述べたように、この動詞「ある」は、瀬戸内町方言では、本動詞としてだけではなく、名詞や第二形容詞（形容動詞）述語のコピュラとしても用いられている。この点から考えれば、名詞（もしくは第二形容詞）述語の中止形に「も」がついたものから発達した、標準語のとりたて助辞「でも」と、その成り立ちにおいて類似していると言えるであろう。

なお、標準語の「でも」については、デ格の名詞が「も」でとりたてられた形とされるものもある（例：箸で切れる→箸でも切れる）。名詞のデ格の形と、名詞述語の中止形が同形であるために、標準語の「でも」については、本来いずれであったものかわからない場合もある。一方、瀬戸内町方言では、デ格相当の名詞は次のような形式で表される。

ア．場所を表す場合：
「ナンティ」という助辞が用いられる。この「ナンティ」は、標準語の場所格の「に」に相当する「ナン」に、接続助辞「て」相当の「ティ」がついた形である（蘇1993参照）。

(42) そんなことないよ、Aマートで売ってるよ。【2011-53】
　ガッシャン　クトゥヤー　ネンド。エーマートナンティ　ウトゥッドー
(43) あそこで売ってるよ。【2011-54】
　アンナンティ　ウトゥッドー

イ．道具、様態、材料、量、原因を表す場合：
　いずれも「シ」という形式が用いられる[13]（蘇1993参照）。

【道具】
(44) 食べにくいから、箸で食べよう。【2011-55】
　カムグルシャンカラン、ハシーシ　カモー
(45) あとで電話で話すね。【2011-56】
　アトハラ　デンワシ　ハナシュンカラン

【様態】
(46)（相手が外国人でも）身振りで大体伝わるよ。【2011-57】
　ミブリシ　テーガヤ　ワカイドー
(47)［風邪を引いたという友人に］
　裸で寝たんじゃないの？【2011-58】
　ハダカシ　ヌプタンムン　アランナ

【材料】
(48) これ、お米で作ったんだよ。【2011-60】
　クッリャ　クムィシ　トゥクティドー

【量】
(49) 友達と２人で行くの。【2011-61】
　ドゥシトゥ　タルシ　イキュッドー
(50) 大体３日でできるよ。【2011-62】
　ダイタイ　ミキャーシ　ドゥクィユッド

【原因】

原因を表すデ格相当の形式を確認するために、次の調査文（51）を提示した。自発回答では「風邪で」の代わりに、「風邪引いて」に相当する「カゼ　ヒチ」という形式が回答されたが、その後の確認で、「カゼシ」と「シ」を用いて言うことも可能であることを確認している。

（51）パートさんが２人風邪で休んだの。【2011-59】
　　パートシュン　クヮガ　タル　カゼ　ヒチ　ヤスディチヨー

このように、標準語の格助辞「で」に相当するのは、場所を表す場合は「ナンティ」、他の場合は基本的に「シ」である。標準語のように、格助辞の「で」と、とりたて助辞の「でも」が共起する際に同音衝突を起こすことはない。このためか、上記のデ格相当の名詞に「アティム」がつく場合には、先に挙げた用例（30）及び下の（52）（53）の回答のように、格助辞を残したまま「アティム」がつくのが「自然」な言い方であるというコメントが得られた[14]。

（30）再掲：［友人の服が破れているのに気づいて］
　　ピンででも留めておく？【2011-21】
　　ピンシアティム　トゥムーティ　ウキュンナ／ウキュームン？
（52）このお肉、お箸でも切れるね。【2010-48】
　　クン　ニクヤー　ハシーシアティム　キリャーレルバヤー
（53）このぐらい、一人でも運べるよ。【2010-49】
　　カッサグライヤ　チューリシアティム　ムターレルド

用例（30）のように、〈例示〉の場合には、標準語でも「ピンででも」と、「名詞-で-でも」という形で用いられる。しかし、（52）（53）のように、〈譲歩〉の場合には、「名詞-で-でも」（「箸ででも」「一人ででも」）という形より、調査文に示したように「名詞-でも」（「箸でも」「一人でも」）という形のほうが好まれると思われる[15]。この場合、名詞につく「でも」が、格助辞「で」＋とりたて助辞「も」であるのか、単独のとりたて助辞「でも」であるのか、判別は難しい。しかし、瀬戸内町方言の「アティム」に関しては、格助辞を含んだ形態ではなく、「アティム」全体でとりたて助辞として機能していることが、上のことから確認できる。

ここまでに見てきたように、瀬戸内町方言の「アティム」は、従属節の述語を構成する形式が、とりたて助辞としての機能を発達させたものと考えられる。なお、「アティム」は名詞だけでなく、次のように修飾語や述語となる動詞もとりたてることができ、既にとりたて助辞としての資格を十分に獲得していると考えられる（(54)は〈譲歩〉の例、(55)は〈例示〉の例である）。

(54)［足を負傷中、近所のおばあさんの米寿のお祝いに誘われ］
おばあさんのお祝いなら、はってでも行くよ。【2011-97】
オバーサン　ユーエナバヤー、ホーテアティム　イキュッドー
(55)［友人と外出中、銀行に行きたいという友人に］
じゃ、私はその辺を歩いてでもいるよ。【2011-98】
ワンナ　ウンブテアティム[16]　アッチアティム　ウッドー

以上本節では、瀬戸内町方言の「アティム」について、標準語の「でも」とその形式の由来が非常に類似していることを確認した。

4.2.2 〈例示〉における文タイプの制約

第２節で確認したように、標準語の〈例示〉を表す「でも」については、出現する文のタイプが、未確定な事態を表す文に限られることが先行研究で指摘されている（丹羽1995、澤田2007等）。具体的には、次のような「勧め」や「勧誘」、「推量」を表す文に限られる。

(56) 麦茶でも飲んで。【2011-12】
ムギチャアティム　ヌメーバー
(57) 島唄大会でもしようか。【2011-19】
シマウタータイカイアティム　シュームン／スローカ
(58)［子供を探している近所の人に対し］
（お宅の子は）川でカニでも捕っているんでしょう。【2011-23】
コーナンティ　ガンアティム　トゥームンナーランカイ／トゥームンナーランナ

これらの文はいずれも確定的な事態を述べる文ではない。これに対し、確定的な事

態を述べる文、典型的には過去の断定文の場合には、〈例示〉の「でも」は基本的に用いられない。この種の文では、標準語では次の調査文（59）のように、「（名詞）か何か」のような別形式が用いられるのが自然である。瀬戸内町方言でも（59）への回答として、「犬か何か」に相当する「インカ　ヌーカ」が用いられていた（「（名詞）カ　ヌーカ」については、4.1節の調査文（32）に関する記述も参照されたい）。

（59）［子供を探している近所の人に対し］
（お宅の子は）川でカニか何か捕っていたよ。【2011-22】
コーナンティ　ガンカ　ヌーカ　トゥータドー

上記の自発回答の後、この調査文（59）に対し、「ガンアティム　トゥータドー（＊カニでも捕っていたよ）」と言えるかを確認したところ、不可であった。そして、「アティム」を使うのであれば、「ガンアティム　ミショレー（カニでも召し上がれ）」、「ガンアティム　トゥローヤー（カニでも捕ろうよ）」のような文がよいとのコメントを得た。これらのことから、やはり「アティム」が〈例示〉に使えるのは未確定の事態を述べる文である場合に限られることが確認できる。文タイプの制約という点でも、「アティム」は標準語の「でも」と類似していると言える。

4.2.3　意味・機能上の異なり

4.1節で、標準語のとりたて助辞「でも」が用いられた調査文に対して、基本的に「アティム」が回答されていることを確認した。しかし、調査において「アティム」が回答されたのは、「でも」が用いられた調査文に限られていたわけではない。本節では、「でも」以外の形式を含む調査文に、「アティム」が回答されたものを示していく。

4.2.3.1　「だって」

まず、「だって」を含む調査文に対する回答を示す。標準語「だって」は、〈譲歩〉を表す点で「でも」と類義形式とされており、以下の調査文（60）～（63）においては「だって」を「でも」に置き換えても意味は変わらない。これらの調査文に対する自発回答でも、「アティム」が用いられていた。

（60）子供だってもう少しましだよ。【2011-52】

ワラーブィアティム、ニャッリャヤ　マシヨー
(61) 誰だって失敗することはあるよ。【2011-47】
タルアティム　シッパイシュンクトゥヤ　アユンヨー
(62) どっちだっていいよ。【2011-48】
ヌーアティム／ドゥルアティム　カモンヨー
(63) せんべいだって、まんじゅうだっていいじゃない。【2011-51】
センベーアティム、マンジューアティム　イッチャドアスカー／イッチャヌムアラン

ただし、同じ標準語の「だって」という形式であっても、次の（64）～（66）のような文で用いられるものは、文意を変えずに「でも」に置き換えることはできない（［　］内に示した場面に注意して見ていただきたい）。しかし、瀬戸内町方言では、これまでの例文同様「アティム」が用いられることが、その回答から確認できる。

(64)［携帯でテレビが視聴可能なことを知っているか尋ねられ］
私だってそのぐらい知ってるよ。【2010-s4】
ワンアティム　ガッシャンクトゥグライヤ　シッチューヨ
(65)［友人から、お前は自転車の乗り方も知らないと言われ］
私だって自転車ぐらい乗れるよ。【2011-49】
ワンアティム　ジテンシャグライヤー　ヌリーキンヨ
(66)［クイズ番組を見ていて、自分が言った答えが間違っていることを兄に指摘され］
お兄ちゃんだって、さっき間違えたじゃない。【2011-50】
ニーチャンアティム　サーク　マチゲトゥタッシャー／マチゲタッシャー

日本語記述文法研究会編（2009）では、標準語の「だって」には次のような２つの用法があるとされる。そして、１）の場合は「でも」とほぼ同じ意味だが、２）の場合は「でも」に置き換えにくいとされている（上掲書：117）。

１）「ＸだってＰ」で、「ＸであればＰではないだろう」という予想をくつがえす意味で用いられる。

(67) チャンピオンだって負けることもあるよ。(日本記述文法研究会編2009)
(68) こんな難しい問題、先生だって解けないよ。(日本記述文法研究会編2009)

2)「XだってP」で、PにXがあてはまることを強く主張するもので、そのことを聞き手や一般の人々が認識していない場合に用いられる。

(69) 母「どうしてこんなに成績が悪いの」
子「うるさいなあ。ぼくだってがんばってるんだよ」(日本記述文法研究会編2009)
(70) カエルだって、生きているんだ。意味もなく殺しちゃいけない。(日本記述文法研究会編2009)

確かに2)に挙げられた例文を下記のように「でも」を用いて言い換えると、やや不自然な言い方となる。

(69') 母「どうしてこんなに成績が悪いの」
子「うるさいなあ。?ぼくでもがんばってるんだよ」
(70') ?カエルでも、生きているんだ。意味もなく殺しちゃいけない。

次に挙げる「だって」を用いた調査文(71)(72)に対する回答に、標準語の「も」に相当する「ム」が現れていることからも示唆されるように、この場合の「だって」は、〈譲歩〉を表す「でも」ではなく、〈同類〉の他者の存在を示唆する「も」に近いものである(この点については菊地2003にも指摘がある。「だって」と「も」の違いについては次節で挙げる丹羽1995参照)。

(71)[勝負の場で勝ちを宣言する対戦相手の友人に対し]
わたしだって負けないよ。【2010-s1】
ワヌム/ワンアティム　ムヘランド
(72)[ある芸人の悪口を言ったところ、友人に「ひどいこと言うねえ」と言われ]
あなただって前に言ってたじゃない。【2010-s3】
ウラム　マエヤー　ガーシ　イチューターッシャー

このように、標準語の「でも」と「だって」は、〈譲歩〉を表す点では共通しつつも、異なりが見られる。上記２）のような「だって」は、発話場面において「聞き手や一般の人々が認識していない」個別のＸとＰとの結びつきを強く示すものである。この場合、既にＰとの結びつきが認められている存在があり、Ｘもその〈同類〉であることが主張される。たとえば（71）では、勝つことを主張している相手がいるという前提で、Ｘである「わたし」がＰである、すなわち「勝つ」ことが主張されている。そこには、「Ｘでも」がもつような、「Ｘ以外の不特定の他者についても当然Ｐである」といった含意はない。このような、不特定の他者とＰとの結びつきを含意しない場合には、標準語の「でも」は用いられないのである。これに対し、瀬戸内町方言の「アティム」は、いずれの場合にも用いられる。

ここまでに示してきた、標準語のとりたて助辞「でも」「だって」と、瀬戸内町方言「アティム」の意味・機能のありようを整理すると、表１のようになる。

【表１：「でも」「だって」と「アティム」の意味・機能】

形式 ＼ 意味・機能	でも	だって	アティム
〈例示〉	○	×	○
〈譲歩〉	○	○	○
〈同類〉	×	○	○

凡例　○：当該の意味・機能あり、×：当該の意味・機能なし

表１から､標準語では「でも」と「だって」が共通してもっている〈譲歩〉の意味･機能だけでなく、両者が独自にもっている〈例示〉と〈同類〉という２つの意味・機能をも、瀬戸内町方言の「アティム」は備えていることがうかがえる。

4.2.3.2　不定語につく「も」

前節で、〈同類〉を表す標準語の「だって」に、瀬戸内町方言では「アティム」が対応していることを見た。〈同類〉を表す標準語のとりたて助辞としては、「も」が代表として挙げられるが、「も」の用法は広く、「だって」と重なるのはごく一部である。丹羽（1995）は、〈同類〉を表す「だって」について、「も」との違いを次のように記述している（下線は筆者による）。

（前略）すなわち、「も」が単に同類であることを示すだけであるのに対し、「だって」は、同類である事態には他の事態だけでなく当該事態も加えられる、つまり、当該事態はこれまで同類であるかどうか考慮されていなかったが、ここでそれも同類であることを示すという働きをするのである。（丹羽1995：43）

つまり単なる〈同類〉を表す場合には、「だって」は現れないのである。瀬戸内町方言でもこれは同様で、「も」が用いられた調査文の多くに対して、基本的に「アティム」ではなく、標準語の「も」に相当する助辞「ム」が用いられていた。しかし、一部ではあるが、「も」を用いた調査文に対し「アティム」が自発回答で現れたものがあった。本節ではその例として、不定語に「も」がついた調査文に対する回答を見ていく。

標準語のとりたて形式に関する研究では、「慣用による」もので、「部分的なもの」ではあるものの、不定語につく「でも」（この場合は〈譲歩〉を表す）と「も」が、それぞれ肯定文と否定文において対照的に用いられることが指摘されている（丹羽1995参照）。つまり、肯定文では「でも」が、否定文では「も」が用いられ、それぞれ全面的な肯定、全面的な否定を表すというものである。

(73) a．何 {でも／？も} 食べる。
　　b．何 {？でも／も} 食べない。（丹羽1995：用例⑳）
(74) a．誰に {でも／？も} 会える。
　　b．誰に {？でも／も} 会えない。（丹羽1995：用例⑳）

ただし、「部分的」であると指摘されているように、例外もあり、たとえば「ど」のつく不定語の場合、「でも」は通常肯定文でのみ用いられるが、「も」のほうは肯定文でも否定文でも用いられ、全面的な肯定または否定を表す。つまり、肯定文では「も」と「でも」の双方が使用可能となるのであるが、両者はいつでも交代可能というわけではない。次の調査文（75）（76）のような文において、「どれも」の代わりに「どれでも」を用いるのは不自然に感じられる。これに対し、瀬戸内町方言では、自発回答でまず「ドゥルアティム」という、「アティム」を用いた形式が回答された。先に見たように、「アティム」は標準語の「でも」や「だって」に相当する形式であるが、標準語ではこのような場合に「どれでも」「どれだって」を用いるのは不自然である。この場合は「どれも」が最も自然な言い方だと考えられる

が、自発回答後の確認において、「どれも」に相当する「ドゥルム」を使って言えるかを尋ねたところ、可能だが方言らしくないとコメントされた。

(75)［旅先でお土産のハンカチを選んでいて］
　どれもきれいだね。【2010-26】
　ドゥルアティム　キュラーサルヤー
(76)［レストランでメニューを見ながら］
　どれもおいしそうだね。【2011-40】
　ドゥルアティム　マーグサヤー

一方、同じく「どれも」を用いた調査文（77）に対しては、自発回答で「ドゥルム」が回答されている。しかし、１つ目の自発回答の述語「キニイリャンナー」は標準語の「気に入らない」に相当する否定形式であり、「イマイチジャヤー（いまいちだ）」は、形式上は肯定であるものの、語彙的には否定的な意味を伴っている。このことが（75）（76）の回答との違いに影響している可能性も考えられる。肯定文で「アティム」、否定文で「ム」が用いられるというのは、一見すると、不定語には肯定文では「でも」、否定文では「も」がついて対照的に用いられるという、先に示した標準語の不定語の傾向との並行性が感じられるが、（77）については、その後の確認において「アティム」も使えるとされており、さらなる検証が必要である。

(77)［洋服を見に行ったがあまり気に入ったものがなく］
　どれもいまいちだね。【2011-45】
　ドゥルム　チョット　アンマリ　キニイリャンヤー／イマイチジャヤー

他の不定語が「も」でとりたてられた調査文に対しては、自発回答では基本的に「ム」が用いられていた。自発回答後の確認で「アティム」も使えるかと尋ねたところ、肯定文の調査文（78）（79）についてはともに使用可能とのことであったが、否定文の調査文（80）については少し悩んだ末、「いい所でも悪い所でも」といった句に続けばという条件つきで可能、（81）については「アティム」の使用は不可とコメントされた。（82）については未確認であるが、（81）の「何も」を用いた否定文で不可であったことを考えれば、こちらも不可であると予想される。

【肯定文】

(78)［昼ご飯を食べる店を探しながら］
　どこもいっぱいだね。【2011-42】
　ダンクム[17]　イッパイジャヤー

(79)［土産物屋を何軒かはしごした後］
　どの店も同じものばっかりだったね。【2011-43】
　ダーノ　ミセム　オンナシムンブハリアタヤー

【否定文】

(80)［奄美の色々な店を紹介する番組を見ながら］
　こんなところ、どこもシマの人はいかないよね。【2011-46】
　ガッシャンドローヤ、ダーム　シマッチュヤ　イキャンドヤー

(81)［何か言ったかと聞かれ］
　何も言ってないよ。【2011-43】
　ヌーム　イチネンドー

(82)［集落の掃除の日、開始時間なのに誰も集合場所に来ていない。独り言で］
　あれ、だれもいない。【2010-25】
　ハゲー、タルム　ウランバー／チューランバー

また、次の不定語に「でも」がついた調査文（いずれも肯定文のもの）に対しては、「アティム」が用いられていた。これは4.1節に示した結果と同様である。

(83) 小説でも漫画でも面白ければ何でも読むよ。【2011-39】
　ショーセツアティム、マンガアティム、ウムシリサルバ　ヌーアティム　ユミユッドー

(84) おいしいから、いくつでも食べられそうだよ。【2010-s16】
　マーサルヤー、クレ。イキャッサアティム　カマールチャゲサル

上に示したように、標準語では不定語に「も」をつけるようなケースにおいて、瀬戸内町方言では一部「アティム」が用いられている。はっきりと違いが感じられるのは、「どれも」が肯定文で用いられる場合で、自発回答で「ドゥルアティム」が回答されている。また、「どこも」のような、他の「ど」で始まる不定語が「も」

でとりたてられた肯定文の調査文については、自発回答では「ム」が用いられていたものの、その後の確認では「アティム」も使用可能だというコメントを得ている。標準語でもこれらの不定語は、肯定文において「も」と「でも」のいずれにとりたてられる場合もある。文脈によっては「も」と「でも」の間に違いがあまり感じられなくなるケースもあるため、慎重に分析を進めなければならないが、「アティム」の意味・機能を探る一つの観点として、不定語をとりたてる用法には今後の調査でも注目していきたい。

以上、本節では、瀬戸内町方言の「アティム」と標準語の「でも」の間に見られる差異について検討した。

5．まとめと今後の展望

本稿では、瀬戸内町方言のとりたて形式について行った調査の一部を報告し、標準語との比較対照を試みた。本節では、その概要をまとめ、今後の展望を述べる。

5.1　調査結果のまとめ

本研究で行った調査において、標準語のとりたて助辞「でも」に相当する形式として、瀬戸内町方言では「アティム」という形式が用いられていることが確認された。そして、この「アティム」について、本稿では以下のことを確認した。

1）「アティム」は、以下の点で標準語の「でも」と類似している。
①形式上、コピュラとして働く動詞「ある」の中止形「アティ」に、とりたて助辞「ム」がついた形と考えられる。
②〈逆接仮定条件〉を表す名詞または第二形容詞述語のとる形式と同形である。
③とりたて助辞として〈譲歩〉または〈例示〉を表す。
④〈例示〉として用いられるのは、未確定の事態を表す文に限られる。

2）「アティム」は、以下の点で標準語の「でも」と異なる。
①標準語の「だって」に相当する、〈同類〉を表す形式としても用いられる。
②不定語につく用法は、必ずしも標準語の「も」と「でも」の用法に準じたものではない。

まだ不十分な点はあるものの、本稿では、瀬戸内町方言のとりたて助辞「アティ

ム」について、標準語の「でも」との間に見られる共通点と相違点を明らかにした。

5.2　今後の展望

本稿では、瀬戸内町方言のとりたて助辞「アティム」を取り上げ、「でも」を中心とする標準語のとりたて形式との比較対照を行った。「アティム」は、基本的に標準語の「でも」に相当する形式のようであるが、異なる点も見られる。ここでは、両形式の共通点と相違点から考えられる、今後の展望を示しておく。

「でも」と「アティム」は、その形式の成立過程、とりたて助辞としての意味・機能の発展のしかたや、現れる文タイプの制約などに共通点が見られる。三井(2003)では、国立国語研究所（1989）の成果をもとに、「極限」（本稿で言う〈譲歩〉）を表すとりたて形式の、〈例示〉用法の発達の有無について複数の方言間で比較し、その結果を次の表２のようにまとめている(三井2003：p.126の表１を転載)。そして、「例示（並列）[18]」に使われるものは、すべていわゆる「断定の助動詞」を含んだ形式であることを指摘している。この表の中には、標準語の「でも」「だって」と、奄美・沖縄方言の形式として「やてぃん」が挙げられている。この「やてぃん」は、本稿で扱った「アティム」と基本的に同じものと考えられるが、表２からは、奄美・沖縄の「やてぃん（アティム）」と標準語の「でも」の違いは見えてこない。また、三井（2003）では、「だって」も「極限」（〈譲歩〉）を表すものとして挙げられ、比較の対象にされているが、〈同類〉を表す場合に関する検討は行われていない。

仮に、表２の右端に、「だって」が表すような〈同類〉の欄を設けた場合、「やてぃん（アティム）」のみが、すべての意味・機能を果たすものとなる。さらに、表２からは、「極限」（〈譲歩〉）と〈例示〉の連続性が示唆されるが、本稿で見た「アティム」と「だって」の共通点からは、「極限」（〈譲歩〉）と〈同類〉との連続性もうかがえる。

【表２：「極限」と「例示」の用法における主な形式の現れ方（三井2003)】

形式＼用法＼調査文＼地域		例示(一例) お茶でも飲もう。(44図)	例示(並列) パンでも御飯でも好きな方を食べなさい。(45図)	極限 子どもでも知っている。(46図)＝図1
さえ	本土各地			△
かて	近畿			○
だって	東日本		△	○
じゃち	高知		○	○
やていん	奄美・沖縄	○	○	○
でも	本土全域	○	○	○
なりと	近畿・中国九州西部＋東北中部	○	○	
ども	山口・九州	○		

※ ○は，その形式がその用法で使われることを示す。
※ △は，その地域で使われるが，地点数が少ないことを表す。
※「なりと」の分布地域については，本文参照。

これらの点の検証には、他方言におけるとりたて形式の調査が必要となるが、日本語におけるとりたて形式の体系を考えるにあたり、非常に有益な観点の一つであると思われる。今後はこのような他方言との比較も視野に入れて、調査を進めていきたい。

【注】

1）本稿では、いわゆる「助詞」は、独立の単語ではなく単語の一部であるとみなす立場から、「助辞」という用語を用いる（鈴木1972参照)。

2）〈譲歩〉の用法については、「極限」などとも称される（沼田・野田編2003)。また、「でも」による〈例示〉は、「など」が表すような〈例示〉とは異なり、「選択的例示」(沼田2000)、あるいは「確定回避」(澤田2007）などとも称されるが、本稿では便宜的に、それぞれを〈譲歩〉、〈例示〉という用語で称しておく。

3）以下、例文には、（　）付きの番号を付す。例文末尾に出典や調査文番号が示されていないものは、筆者による作例である。

4）ただし、〈逆接仮定条件〉を表す節の述語か、〈譲歩〉を表す名詞のとりたての形かといった区別が難しい、どちらともつかない例もあり、両者の間は連続的である（丹羽1995参照)。

5）このような文のタイプ・モダリティの制約は〈譲歩〉の場合にはない。

6）なお、回答の際には、必ずしも調査文と対応しない語形が現れることもあるが、本調査が対象とする形式の分析の妨げにならない限り、特に注記はせず、自発回答をそのまま記すことにする。

7）瀬戸内町方言には、標準語とは異なる音声が含まれるため、本来は音声記号で表記すべきところであるが、本稿では便宜的にカタカナ表記を用いる。このため、実際の音声を必ずしも適切に反映できていない部分があることを予め断っておきたい。

8）発話文内の成分を補う際には丸括弧（　）に括って調査文と同じ行に、状況を表す情報を補う際には角括弧［　］に括って、調査文とは行を分けて示すこととする。

9）直訳すると、「100万円ででも」に相当する。4.2.1節のデ格に関する記述も参照されたい。

10）なお、標準語では「お茶でも飲もうか」を、「お茶など（お茶なんか）飲もうか」とは言いにくいが、瀬戸内町方言では、「など（なんか）」に相当する「（ヌ）ンキャ」を用いて、「チャンキャ　ヌモーディー」のように言うことが可能である（水谷・齊藤2007参照）。瀬戸内町方言の「アティム」と「（ヌ）ンキャ」は、標準語の「でも」と「など（なんか）」以上に、その意味に近さが感じられる。

11）このような中止形の使用については、単に過去の出来事を述べる文の「言いさし」で、文脈によって過去であることが読み取れるというものなのか、中止形に既に過去の意味が焼きつけられており、特に文脈の制限なく、終止の位置で過去の意味を表すことができるというものなのか、疑問がわく。この点に関しては、蘇（1993）には明確な記述がなく、本研究でもまだ確認できていない。今後の調査で確認しておきたい。

12）次のような例文が挙げられている（蘇1993：114。「ぃ」は中舌音の「い」を表す）。

・雨が降らないものだから稲が心配じゃ
　アムぃヌフラムンナテぃイニガシワジャ
・花が綺麗なものだから種を貰って来た
　ハナヌキュラサンムンナテぃタヌぃムラテぃッチャ

13）この「シ」については、動詞「する」の中止形「し」が起源とされているが（松丸真大氏からの教示による）、現在では助辞として用いられていると考えてい

いと思われる。

14）調査者が、格助辞を伴わない形式を挙げて、このように言えるかと尋ねると、格助辞のない形も可能だが、格助辞がある形のほうがいいとの回答であった。標準語ではむしろ「名詞-で-でも」と同音が続くことを避けるためか、「名詞-でも」の形で現れることが多いかと思われる。

15）標準語において、〈例示〉の場合と〈譲歩〉の場合とで、なぜこのような違いがあるのか、疑問が生じる。「でも」が本来もっていた、従属節の述語として〈逆接仮定条件〉を表していた性質がどの程度残っているかといった問題とも関わると思われるが、現段階では十分な考察が行えないため、この点に関する議論は今後の課題とする。

16）「その辺を」の部分も「アティム」でとりたてられ（「ウンブテアティム」）、「アティム」の重複使用が見られるが、ここでは後に続く「歩いてでもいるよ」が、「アッチアティム　ウッドー」と回答されているところに注目されたい。

17）「ダンクム」は、「ダーム（どこも）」と「クマム（ここも）」の融合形か。「どこもかしこも」のような意味の語句と思われる。

18）本稿でも「例示（並列）」を表す「でも」の調査文を用意し、調査を行っている。下に挙げるように、この場合も「でも」に対応して「アティム」が用いられることが確認できる（本文中に挙げた調査文（83）の回答も参照されたい）。

・［捨てるつもりの洋服の山を見て、もらってもいいかと尋ねる友人に対し］
シャツでも、スカートでも、好きなの持って行って。【2011-38】
シャツアティム、スカートアティム、ヌーアティム　ムッチイジ　カモンドー

【参考文献】

蘇鉄嘉（1993）『奄美大島瀬戸内の方言』私家版
菊地康人（2003）「現代語の極限のとりたて」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版
澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法５　第９部とりたて　第10部主題』くろしお出版
丹羽哲也（1995）「「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究』47-7　大阪市立大学文学部紀要

沼田善子（2000）「とりたて」金水敏·工藤真由美·沼田善子『時・否定ととりたて』岩波書店

水谷美保·齊藤美穂（2007）「方言との接触による標準語形式の意味·用法の変容－奄美におけるとりたて形式「ナンカ」の用法の拡張－」『日本語文法』7-2

三井はるみ（2003）「極限のとりたての地理的変異」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版

On *Atim*, a *Toritate* Particle of the Setouchicho Dialect in Amami Island: Comparison with the Standard Japanese *Toritate* Particle, *Demo*

SAITO Miho, MIZUTANI Miho

The Setouchicho dialect in Amami Island belongs to Northern Ryukyuan Dialects. This paper shows the result of the investigation on *atim*, one of the *toritate* particles of the Setouchicho dialect, comparing it with the *toritate* particles in standard Japanese, especially with *demo*.

Atim functions as a marker of 'concession' or 'exemplifying' as *demo* does in standard Japanese. *Atim* has similarities to *demo* also in its origin, the path to develop its meaning and function, and grammatical restrictions on its occurrence. On the other hand, *atim* can be used in some contexts in that *demo* cannot occur. One of the contexts is where *datte* appears in standard Japanese in order to show a certain type of 'similarity'. The distribution of *atim* revealed in this paper implies a connection between 'concession' and 'similarity' that the *toritate* particles show in a variety of Japanese dialects, in addition to the one between 'concession' and 'exemplifying' indicated in Mitsui (2003).